

特殊な身体になるための準備

小御門優一郎(脚本家、劇団ノーマーツ)

今回このシンポジウムに参加させていただくにあたって、同じ劇団ノーマーツの藤木良祐と、改めてこの1年間やってきたオンライン演劇という活動を振り返りました。そもそも共集性という言葉からして、それをどう獲得していくかに意識的に取り組んでいたわけではないんですが、我々の活動が、もしかしたらそういうことができるものだったかもしれないというのを改めて、まとめさせていただいて非常に勉強になりました。皆さんの話題提供からも、「儀式への参与」や「コンテンツを見ている時の特殊な身体」など、気になるワードもいくつかありました。私は普段は脚本家、演出家として、プラットフォームをつくる側の藤木に対して、コンテンツをつくる側として劇団ノーマーツの活動をやっておりますので、オンライン演劇というものがどう共集性を生み出していったかを振り返りつつ、これまで皆さんがお話いただいたことと近いところにも言及させていただきます。

改めまして、我々は2020年の春に旗揚げされた団体です。「劇団」とは名乗っていますが演劇畑出身の人間は実は少なく、藤木のようなエンジニアや映画プロデューサー、イマーシブイベントを主催している人間などと、2020年の春頃に撮影現場や劇場もほぼすべて止まっていた、その制約のなかで何か新しいコンテンツを生み出せないかなという意思が一致したメンバーが、広くエンタメ畑から集まって始まっています。演劇をアップデートしていこうと始まったわけではないという前提をお含みおきいただいて、見ていただければと思います。

最初は140秒の動画をTwitterのタイムライン上に投げるという形で活動を始めました。Zoomのミーティングルームを用いた「Zoom演劇」というものですが、電話だったら各話者と話者が、電話の糸、線で繋がれていてコミュニケーションしているというイメージですが、このミーティングルームだと、ひとところにオンライン上の仮想のミーティングルームに集まって話し合いをしているというイメージがある。そこに人が出たり入ったりして、会話することで時間が進んでいくというところに、少し演劇性があるんじゃないかということで、140秒で完結する短編コンテンツとしてをつくってアップしていました。これはTwitter上に完パケの動画として上げているので、一回性とはまだ無縁の状態でした。再現性があって誰でも同じ状態のものが見られるわけです。編集せず

に140秒の切り出しという形でつくっていて、ヨーイドンというドン出しで始まって、終わりのドン出しで切る。稽古場での演者の稽古を切り出してお見せしているというような印象はあったんですが、まだライブをお見せしているという感覚はなく活動をしておりました。まだこの段階ではNetflixだったりYouTubeに上がっている、データが劣化しない、再現性のあるコンテンツとして活動していて、ここからどうやって、演劇というある種儀式のようなものに観客に参与してもらえるか、見ている人が、このタイムライン上に流れてきたものを見つけてちょっと立ち止まって見るというのではなくて、劇場に足を運んだような気持ちになるにはどうしたらいいかということで、生配信を前提とした自主興行に舵を切っていました。

我々が生配信の長編公演を実施する時は、基本的には藤木からエンジニアがつくってくれたオンライン劇場ZAのような、専用のプラットフォームを使って行っていますが、生配信の形態に移行して初めて、演劇が成立するための「いま」「ここ」という2要素を擬似的に満たすことができるのではないかという感覚がありました。もちろん画面の左上に「LIVE」と出ておりますように、演者は場所こそそれぞれ別々でも、今、この瞬間にどうやら演技しているらしい。我々もそれを証明するために、チャットの感想を拾ったりだとかと、双方向性を強化していった、間違いなく今やっていますよ、ということ強く観客に対してアピールしていきまして、それはある種、YouTube Live等のライブプラットフォームでも担保できるものだと思っています。その次に、場所性、「いま・ここ」の場所の部分はどうやって疑似的に補填するかが、エンジニア等と一緒に努力してきたところで、このオンライン劇場の配信サイトを劇場に見立ててみたんです。例えばYouTubeの動画再生欄とかだと、コンテンツの動画がメインにあって、横には関連動画等いろいろな他のコンテンツへの通路がたくさん開けている状態で視聴します。一方で、劇場や映画館というのはある種の袋小路で、行き止まりの場所にみんながそれを見るために行って、見終わったらまた同じ出口から出るという、その行き止まり性が劇場という空間たらしめているという仮説のもと、例えばこの2作目の『むこうのくに』は、いわゆる細田守監督が描くような仮想空間が舞台で、「ログイン画面」を疑似的につくって、そこから劇場の中に入って



『門外不出モラトリアム』。本作から、Zoom を使って演劇を始めた。



『むこうのくに』の舞台となる SNS「ヘルベチカ」のログイン画面。物語の展開に合わせて UI が変化する。

きてもらおうという、その体感を疑似的に再現したりと、この場所性をどうやって疑似的に出していくかを、UIのプラットフォーム側で工夫していました。

同時性をどう強化していったかという、我々の公演は、観客に対して最初から最後まで本当に止めずにやってるよというのを強くアピールしようという方針でやっていました。実際の劇場での公演のように、客入れ時間を設けて、配信サイトページ自体は本編が始まる30分前から開けて、観客はそこに入ってくることができる。そこには、開場中のBGMが鳴っていて、キャストによる生の前説、諸注意等のアナウンスがある。本編が始まって、その後、アフタートークまで一続きでやる。チャット欄は可視化して、本編の隣に常に表示されている形にしたというのが、共集性を生み出したひとつ、大きなファクターだったかなと我々は思っています。この

チャット欄には、他の観客の感想もリアルタイムでたくさん流れてきて、これがあることで、どうやら私たちは、キャストたちが今演じてるものを同時に鑑賞しているらしいという感覚が発生する。実際の劇場で、隣にも座っている観客がいて、同じものを見ているというその感覚を、これによって擬似的に再現することができたのではないかなと思っています。こういうところが、演劇という——もちろんこれを演劇と呼ぶか、議論はあるとは思いますが——ある種儀式にどう参与するか、我々の応答だったと思います。我々はそれに、双方向性というところで取り組み、一方で、開場時間や本編が始まる前の準備の時間もリアルな劇場と同じく設けたところも、観客たちにそういうコンテンツを享受する、特殊な身体になってもらうための準備期間を意図せず設けていたのかなと、本日の皆さんのお話を聞いて思いました。